れたが我も見たる所ば堂々たる丈夫なりと雖もいきたる妻孥をして餓死を免がれしむること能はず我と汝は有情非情の差はあれどその同じく人間に冷落するは一なり我今一擧手を假して汝を中禪寺湖の清波の上に轉ずもし幸あらば活龍と化し九天の上に上よ我も運よくば夙昔の志を成して名を汗青の中に留ることもあるべし汝が早く天に上るか我が先きに身を立るか請ふ汝と共にその孰れか早きを競はむとて之を擲ること再三にして水中に投じぬ。這般の事たる頗る見聞に類したりといへどもまたその前途を默觀して自ら慰めたるなり草雲が當時の心中思ひやられて最とあはれなり。

草雲はかくの如く日光山の近き邊りを遊歷して畫を賣りたれど得る所太だ少なく旅宿の料も足らず勝なりしかばまた江戸に向つて歸りぬ。草雲の歸ることをのみ日夜待ち戀ひつゝありし菊子と格太郎に齎し來りたる旅費は行路にやつれたる寂びしき顏のみなりき。

この時に當りて一代の詩宗たる梁星巖その妻張氏紅蘭と共に江戸に出で詩佛、寛齋、五山、如亭等の後を承けて騷壇の主盟となりたるがその門下には小野湖山、岡本黃石、竹內雲濤、遠山雲如、森春濤、鈴木松塘、伊藤聽秋、大沼枕山、江馬天江の如き天下の才髦集まりて之に唱和し一時尤も盛を極めたり。草雲は彼の奇節をもて一世を驚かしたる松浦武四郎（多氣志樓と號す）と交りたれば武四郎に依りて雲如、湖山等を知りまた二人の紹介をもて星巖に謁し大にその風流高節に心服したりければ此れより誠を傾けて結納し大に益をうけたりき草雲が書史に涉りて故實を考へまたひろく畫論などを讀みたるは實にこの間なりといふ。

當時畫家にては高久隆古、江崎寛齋の如き崋山門下の椿山、半香、秋暉を始めとし春木南華および南湖の如き鈴木其一、佐竹永海、谷文二、遠坂文雍、大西樵年あり書家にては市川米庵、龜田綾瀨の一派あるは石井潭香、關雪江の如き菱湖門下の中澤雪城、大竹蔣塘、萩原秋巖などありて東都の藝苑頗る濟々たりしかば之等の畫家文人等相謀りて荐りに書畫會を開きたりきこの書畫會は小會二朱、大會一分の會費にて大會は例に柳橋の萬八樓に開かれたりき。書畫の會は草雲も好めることといつも缺さず出席したるがその會費の如きもみな菊子が調へたるものなりき。有樂町に潛める佐藤豐藏といへる七十有餘の老人は草雲が門人にて能く當時の事を知る者なるが語りて曰く「翁が書畫會に赴かむとて行て來ます

といひ夫人が行ていらしやれませと手をつきたる時は夫人は既に草雲の財囊（二分あるは一兩の金を納めおきたるなり若し且那樣暫らくとある時は夫人が遣繰いまだ成らざりしなり」と菊子が當時の苦心想ふべきなり。

草雲は前にもいへる如く酒の上最とあしき性にて書畫會の席上にても醉ひしれはては座上の畫家文人等を痛罵しあるは器物などを擲ちて亡狀を極め傍ら人なきが如し故に座上の客も草雲の來るを見るやすはや梅溪が來れりとて戰々として相戒めその漸く醉ひ初るを見る時は何時となく申合せたるが如く悉くこそ〳〵と逃げ去りたりきといふ。

草雲を暴れ者の東の大關とし西の大關と立てられたるが竹內雲濤なりき。雲濤名を鵬、字を九萬と云ひまた星巖門中の一奇才なりしが酒を嗜むこと甚だし

く自ら醉死道人と號したり別號を見てもその性行を知るべし雲濤と草雲の爲めには何時の會も踏み暴らさるゝが例なりき。

ある時柳橋の萬八樓に大書畫會あり都下の文人畫家多く集まり筆揮ひ墨飛ぶ時に竹内雲濤もまた座に在り酒に醉ひ座客を罵り具さに亡狀を極め果ては草雲に向ふ草雲今は忍ぶに堪えず直に蹶起して起ち壽直に雲濤を踏倒しその襟頭を攫むで圓窓より中庭に投ず雲濤も之にはいたく慾りたりけむこの後は書畫會に來りても生れ替りたるが如く最と順しくまた前の如き狂態なかりき。當時また蘭溪といへる畫家あり山水をよく作るをもて名あり元は越後の產にて兩國に住ひ書畫會にも出でたるが人と爲り傲慢にして禮なき行も多かりければ人みな蘭溪を面憎くおもひたりき一日草雲たま〳〵之を訪ふ時恰かも蘭溪は酒を酌み放歌しつゝありしが草雲を見て杯を與へ「おい梅溪」などと呼捨に小僧扱にしたりければ草雲いかで默してやむべき滿面に朱を漲ぎ直に起て大刀を脱き放ち汝越後ダボの分際として猥りに他を呼捨にするとは無禮もまた甚だし我が大刀の切味を見よといひさま座に在る圓行灯を眞二つに打割りたるに蘭溪大に驚き且つ慴れて謝したりきといふ。

草雲の行かくの如くなりしかば時にはまた暴客に會ふてその一命も危きことわりき。或る時また萬八の會あり草雲は山谷堀より小舟を倩ふて之に赴きやがて酒宴にうつりたるほどに一人の侍あり泥の如く醉ひ座上に陳べたる多くの膳部を跨ぎつゝ躍り來れり來その白柄組の暴れ者なるを聞きみな慴れて之を避く草雲は彼の爲す所を目だゝきもせで睨みつゝありしが侍遁むで草雲の膳を脚下に蹂躪せり草雲今は用捨もなく猿臂を延べてその脚を取てねぢ倒し忽ち二人の組打となり或ひは上になり或ひは下になりくんづほぐれつ相鬪ひ膳は碎け皿鉢は飛び座上狼籍たり然るに誰ありて之を引分けむとする者なく「惡ると惡るとの喧嘩なれば捨おけ」など細語き却く與あることにして傍觀す稍や暫らく爭ふ中に二人とも爭つかれて引分れたり。會も之が爲めに壞はされて散會することになりしかば草雲もさらば歸らむとて船に乘りたるに北には行かず南に〳〵と進むにぞさてはおのれが船と他のものとを取違へたりと思ふ間もあらせず五六人の侍ども小舟にて來り草雲が乘れる船に飛こみつゝそは萬八に爭ひたる白柄組の侍が仇を復さむが爲めに同志の者を呼びて草雲を路に要したるなりき草雲かくと心づきたれど弱蟲ども何程のことやあらむと膽太くも侍等が爲すまゝに打まかせたるに侍どもの爲めに與の中に押こまれゆられ〳〵て或る屋敷につき奥まりたる座敷に引出されたりやがて此に現はれ出でたるは男女三人なり女は最となまめきて倡婦の如き姿にて男はハケ先を散らしたる髪を結ひその容貌獰惡にして夜叉の如しこれぞ即ちその頃世人をしてその名を聞ても身の毛をよだゝしめたる四谷白柄組の頭取なりけり。彼の男は上座に藏六を組み草雲を見下しつゝ汝はよくもわが白柄組の者を投げたりその仇はかへさでかなはず然れど若し能く我がさす杯を受けおふせたらばこのまゝ許して歸らしむべし將たまた受け應へえぬからは直にこの座を起たせず汝が身を鱠に剝みて下物となすべしとて五合ばかりも盛るべき大杯をとりて草雲が前にとおきつ草雲これを聞き笑ひつゝ云ひけるは何事のゝたまふことかと或ひつるに酒を賜はゝらむ

とはこは願ふてもなき幸なり好しや醉ひしれて死するまでも御相手仕るべし扨て公等もし我に敵せざる時は如何にすべきとあるに彼の男云ふさあらむには汝と我は兄弟の盟を結び永く白柄組の頭取ならむと草雲そはおもしろしとて六七人を相手に降るが如き大杯を傾けて相酬ふほどに彼等の四五人もはやかなはじとて遁げ去り頭取たる男も今は酬あかたしとてその座に倒れぬ草雲は孰れもみな口はでにもなき蹋虫共かなと罵りながら扇子を以て手拍子をとり小歌を謠ひつゝしつ〳〵と立去るに之を止めむとする者もなくみな舌を捲きて見おくりきといふ。草雲が勝大なる概ねこの類なりき。

草雲が處々の書畫會を暴れ歩くこと一二年なりしが菊子とても無盡藏を有つにもあらねば遣繰の途もつきはてゝその日〳〵の米代にも窮したれば草雲は日ごろ親しくせる淺草山傳法院の僧正に泣付て金を借らむとて訪ひたるに僧正時しも外に出でゝあらずその歸坊を待たむとて方丈に通り茵や暫く待てども歸らず草雲つれ〳〵なるまゝにその床を見るに厨子を安して觀音を收むその前に掛けたる戸帳は古代錦にて最と善きものなり草雲ふと心に思ひけるは僧正とは最と心やすき中なれば今この戸帳を借り行くも深くは咎ざるべし然なり〳〵と獨り心に頷づきて南無大悲救世菩薩しばらくゆるさせたまへてと戸帳を外づし懷中に隱して歸り知る所の質屋に典し金五兩を得たり。時に桑星巖來りて我等夫妻の物は悉く典し盡して一物もなく今は米鹽の料にも事かきぬ若し一二分あらば暫らく貸してよといふ草雲乃ち金二兩を出して星巖に呈す星巖太く驚きて曰く足下の貧にしてこの黄金を有てるは怪しきの極みなり餉ふこの

金の出處を聞かむと最と危ぶめるもの〳〵如し草雲いふ先生願はくは今はその出處を質すことを許したまへとて辭らず星巖も心に不審を抱きながら持ち歸り數日を經て金を得たればとて返しき時に草雲もまた金を得たれば戸帳を受いだして傳法院に抵り事の始終を謝して戸帳を返す僧正曰くこの後もし然る苦しき場合には包まず告げよ金なりとも米なりとも遣らすべし唯だ佛前の什器のみは憚りあればかゝる事を二たびし玉ふなと深くは咎めざりきと云ふ。草雲老後この事を語りてこの時のみは我もさすがに冷汗を出しつといひぬさもありぬべし。

草雲は今はとのまゝに一家を支へがたく如何にかせむと思ひわづらひつるほどに當時昌平黌の諸生が學費に窮したる時は詩文を賣りて房總を遊歴するに皆思ひもよらぬ得あり若し畫家などが行きたらむには詩文にも勝りて多く潤筆を得べしと聞きてゆのれも試みに遊ばむとて急に家をたゝみ菊子と格太郎の二人を岳翁松井氏に托して又もや筆を戴せて江戸をいでつ。

との遊歴も初めの中は畫を需る者も太だ少なくその日〳〵の旅宿代にも困しき。草雲老後に房總の行を語りて曰く夏の夕に宿に投ずるの料もなくて黄昏の蟬の聲を聞きつゝ田舍の田圃路を歩くは錢なき旅人には最と心ぼそくもまた悲しきものなりと且つ懺悔して云ふ八日市といへる處を過ぎたる時は恰かも朝がけにて財布には一文もなく腹は減る足は疲れる氣はふさぎて前にも後にも動きがたくなりしが忽ち江戸にのこしおきたる妻や子の事を思ひ出でゝは之しきの困苦は物かはと自ら勵ましつゝ行きては止まり止まりては行き遁まぬ足を無理に運ぶほどにたま

〳〵路頭に賣卜翁の屋臺店あり時たま〳〵主人の翁は外に出てゝあらず乃ち心に浮びけるは今我はこの店を借りて暫らく賣卜者たらば得るところあるべしいみしくも考へけるよと獨り心にうなづきつゝその店の中に入り深編笠を冠り笹竹を振かざして徂徠の人の袖をひき留め口から出放題にわからぬことを言ひ漸くにして銭二百文を得たりさらば立去らむとするに傍に竹の皮包の辨當あるを見て押頂きつゝ之を食ひ最と有がたきよしを野臺店に向て述べ再拜して逃るが如く行きたりき空腹にまづきものなしとは異なりけり實にこの時の辨當の山谷、萬八の料理にもまさりて旨かりしことよその夕は彼の二百文をもて旅宿に投じやす〳〵脚を伸べて寢ねたりきこの二百文の今の百兩二百兩にもまさりて有がたかりしよ今思ひいづるも夢なりけりと。この逆歴のつらかりしことこの一事もて知るべし。

かくて草雲はやうに〳〵して銚子までたどりつきてその頃富み昌へたる網主某の家に抵り暫し畫もて世話にならむことと囑みつ某は驕りたる性にて乃公が意にかなふほどの物を畫くの伎倆もあらば世話もしてつかはさゝるものにわらず試みに畫きて見せよと云ふ草雲この豪慢なる語に腹は立ちたれど怒るべきの場合にあらずと胸をさすりつゝ大幅の紙本に水墨もて鯉魚の水に躍るの圖を作る某見て大に驚き俄に禮して言を改め先生は田舍巡りの畫家には得がたき伎倆のある人なり心おきなくわが家に留まりたまへとて手をとりて奥座敷に誘ひ厚くもてなしけり。時に銚子の地に疫疫大に流行しその惡魔除なりとて家〳〵に鍾馗を祭れり某乃ち草雲に囑するにこの像を畫くことをもてす草雲こは我が腕を見すべきの機會なりと思へば心をこめて絹本に鍾馗が劍を握つて橋上に立ち群鬼が橋下に逃れ去るの圖を作りその眼睛を點ずるために成田不動に立願をこめ一七日間一日に二食を斷じ朝夕水に浴して身を潔めその滿願の日に精神をこめて睛を入れたるに實に見るもおそろしきほどめでたく成りたりき是れ草雲が鍾馗を畫きたる初めなりきこの事忽ち銚子中の評判となりて我も〳〵とこの畫を需る者多く意外の潤筆料を得たりきと云ふ。

草雲酒に醉ひては疎暴をふるまひ人をして眉をしはめしむる事ども多かめれどその性いと情にふかゝりければ旅中日となく夕となく江戸の天を眺めくらしわか妻は如何にこの日をくらしつらむさぞや我の云ひかひもなきをはかなみ居るならむわが見も鄙の歸るをのみ待くらしつむらなど思ひいでては五内も爲めに裂るがごと思ひしむものから空手にて歸るも詮なしと思へば畫を好む家を漁り歩きたりしに今圖らずも銚子にて網主の爲めに知られて思はぬ潤筆料を握りてければ矢も楯もたまらばこそ喂乞さへそこ〳〵にして直に江戸に歸り傳法院の門内にて門人なる中山浪江（號を嵩岳といふ）の隣に小さき家を借りて妻子を移しぬ。

久々にて妻子の者の笑顔も見つ旨き酒も呑たりしかど幾ほどもなく銚子より携へ歸りたる金も使ひはたしてまた元の木阿彌とはなりき。

この年の暮にいたりて錢をとる手段もなきまゝに淺草廣小路の大道に露店を構へ雨戸もて風防となして草雲は大刀を横へたるまゝに手拭にて頬冠しその中に藏六を組み紙窩を小兒の望むにまかせて雲龍さては奴などを描き菊子はそが傍らにて糸目つけて之を

三文五文の錢に易へたりきとぞ。時に明る春の森田座の狂言は最もおもしろきものなりなど市中の噂とりな〳〵りしかば草雲ふと思ひけるはこの書看板を描かばまた多少の錢をも得つべしとて自ら座主森田勘彌（よい三津のことなるべし）を問ひ包まずその貧苦を告げて看板の書を托されむことを囑みつ勘彌そを聞き最とわはれに思ひしみて云ふそも芝居の看板といふは例に鳥居氏の手に成るものなれど君の告げらるゝ所もむげに辭みがたし先づ試みに作りたまへ前狂言はしか〳〵後狂言はかく〳〵と具さに筋を語りかつ急きて作り卒らむことをもてす時に草雲家に米もなく饑餓蒼菱などをもて飢をしのぎ居たるをりなりければ家に歸るや直に筆を染めその夜は眠らず明る日の午頃までに卒業し自らその看板を擔ぎて勘彌の家に抵り此にて如何にと問ふ勘彌つく〳〵之を見ておぼえず感嘆して云ふてさもめでたき筆かなことは書院の奥にも飾るべきものにて中〳〵に大道の砂吹く風にさらすべき書にはあらず然はあれど初日もすでに一二日に迫りて他人に作らしむこともならねばこの狂言には最と惜くはあれどこの看板を掲ぐべし聊かそが謝儀にとて一包の金を贈れり草雲は家に歸りて後之を開くに二三分の金と思ひきや五十兩の包なりけり。蓋し勘彌は草雲がかばかりの妙腕ありながら世の嗜好にあはずして飢寒に迫まれるを憐れに思ひて之を賑恤したるなるべし。草雲老後また書を語ることに必らずこの勘彌の事に及び我は當時この金を得て一息つくことを得たりきと。勘彌は河原者なりといへどもさすがに一座の主たり長たるほどありて能くも草雲の書のよのつねならざるを徹見したりけり勘彌は草雲の爲めにはまた一知音なりと

いふべきなり。

嘉永より安政にかけて安藤廣重が歌川豐廣の後を承けて斬新なる意匠をもて弘く坊間の雜事を畫きその名噪々として都鄙に噪ぎ次で井草國芳、歌川國貞などの輩出でゝ浮世畫なるもの盛に行はれ婦人小兒等爭て之を求めたりぎ草雲乃ち曰く此もまた一時なり我も姑らくこの輩の手段を學ばむとて浮世四十八鷹と銘せるものを作りきこの圖には四季の花卉あるは山澗飛流などを取合せし千態萬狀巧に奇思を弄して太だおもしろく成りたりしが草雲さすがに浮世涙の爲す所を學びたるを愧ぢてや門人中山嵩岳の名を畧して繪草子屋に售りて市に出したるにその評いと點しく暫時にして數萬枚を賣ぎ繪草子屋は多く利を得たりき。この四十八鷹のあまりに評判よきより嵩岳とは如何なる書圖にやなど詮索し果ては嵩岳の名を畧したれどその實は『暴れ梅渓』の作る所なりと知れて稍やその伎倆を認る者あるにいたりぬ。之は後の話なるが明治十四五年頃かと覺ゆ博聞社長長尾景弼この四十八鷹の古板木を或る處に求めたるが嵩岳とは如何なる人かは知られどその書は妙なりとて之を洗ひ再び刷りて賣りたり時に岸田吟香たま〳〵清國上海にありて之を見て書を景弼に寄せ四十八鷹の書者は田崎草雲なり我わかき時草雲を知りまた親しく之を作るを見たりき草雲今尚ほ下野足利に健在せるよしを告ぐしたれば景弼直に草雲を足利の邸宅山に訪ふて一本を贈呈す草雲こはめづらしくもまたはづかしき物を見るものかなとて之を繰り返しつゝ見て正しからざる處々には更に筆を加へて景弼に與へたり景弼乃ちその如く改めて刷りき博聞社出版の四十八鷹といふもの是れなり。

草雲はまたこの四十八鷹と前後の時代において眞岡の士越智守弘が物せる下野國誌の挿畫に筆を染めたりこの圖もまた頗る善く今なほ人の鑑賞する所となれりと云ふ。

この時にはすでに草雲の伎倆を知る者もあるに至りしかど尙ほ世に售れず貧まず〳〵甚しかりければ夫妻相謀り緣をもとめて格太郎を東叡山の東漸寺に入れて學童と成したり始め草雲夫妻が家を携へしより十餘年來の長き松井氏よりつねに財物を贈りてその窮を賑はしたりしかど草雲が尙ほ一家の口を糊することを能はざるより菊子の兄なる龜次郎（後に新左衛門といへり）は行末の望もなき貧乏畫師に妹を添はすることを好まずとて取戻すべしなどいひ仕送をも拒みたり。然れど菊子の母勢以子は見るに見かねて常に龜次郎に聽しては物を贈りたりこの使には何時も今の金子がせしとぞこそは親しく金子が余に語る所なりき。

坎壈の纏ふ所となりて日夕窮鬼と相鬪ふこと十餘年その間酒に醉ひしれて狂暴のみふるまひ人をして爪たぢきせしめたる草雲も年を積むに隨ひて客氣やうやく去りにき而立を越えたる後なるが忽ち猛省して思惟すらく文といひ武といひ百工技藝といひ皆自心源を究るにあらざれば決定してその妙に達することを能はざれば可翁、如雪、蛇足、明兆さては眞藝相の三阿彌より近くは里恭、大雅の輩に至るまで多くは敎外の門に趨り痛棒熱喝に接して心田を開拓したりき我もまた堂々たる髯丈夫ならずや爭かでか等閑に物の形像を寫り去るのみをもて自ら滿足すべきにあらず切に望むらくは漆園叟の云へる如く技をして道を進めしめむかなとて禪宗の老宗匠の接心會などある時には必らず行きてその室に入りて垂示を請ひ公案古則を受けて頭りに參究したりき。草雲が果して能く漆桶を打破して歷代の祖師と阿堵の中に相逢ふ底の境界に達したるや否やは今固より之を知るに由なけれどとにかく參禪に依りて相得たる所ありたるものゝ如く此の後は動作言行著るしく變りてまた當年の舊梅溪にあらざりき。草雲は常に云ふ書は猶ほ藥の如し病の起りたる時に服せば則ち可なりとて書を讀みても深く意を用ひざりしかど禪のみは尤も心を寄せたるものと見えてその老後に病ある時にても朝まだきに起き香を炷き壁に面して趺坐しその病革りて目をふさぐまで一日として之を廢したることなかりき。樵子の徑に由らずむば爭かでか葛洪の家に到らむ芳ばしからざる梅溪の時代を去らしめたるは實に參禪の功なりけり。

草雲が三十一二歳までは梅溪と號し又は廣原朝臣明義などゝ稱したりしが參禪の後は共に之を廢し更に名を芸といひ又芸の字を分ちて宇を草雲としこの字をもて行ふこととし芸に七里香の稱あるにとりて別にまたその齋號に題して七里香草堂といひぬこは嘉永の末年の事なりき。

岸田吟香云はく草雲は梅溪の號を廢して後は如何ほど酒を飲みてもまた前日の如く害を人に加ふることなかりき然れど人なほ之を知らずその書畫會に來たるを見て之を避けて去らむとする者あれば乃ち曰く、田崎梅溪といへる暴れ者はすでに死したり我は田崎草雲にて梅溪にはあらず草雲は梅溪の如き口に任せて悪謔をいひまた徒らに鐵拳を他の頭上に加へて自ら快とするが如き暴れ者にあらねば安心して座に居たまへとて之を止めたりきとぞ。されば此れよりは

昨日まで疎みたる者も漸く親みまた從ふて書を需る者もありて前の如き妻子をして飢寒に叫ばしむることなきにいたりぬ。

一波纔かに止みて一瀾また起るは世海には免かれざるの習ひなるが草雲は禪要に參してより大にその氣質を變化しまた前日の梅渓にあらず書も漸く藝林に知らるゝに至りしかば菊子はやれうれしやと胸を撫で下すの間もなく嘉永三年の末より草雲忽ち病に臥しき菊子乃ち日夜その枕邊に侍して湯藥をすゝめ介抱至らざる所なくいまだ曾て衣を換へて寢ねたることなかりきと云ふ。かくて三寒暑を閲みして草雲の病愈えぬ。その間菊子が纖々たる手一つにて湯藥の料よりその日〳〵の米代に至るまで才覺したるなりその苦心實に冒瀆の外に出でたりき。

草雲漸くにして病より起ち菊子また代て床につきぬ。その身は最と健かなるかの如くに見えて心は虛脱し人事を辨ぜず謂はゆる慢忘なるものなり草雲大に驚き醫につきて之を診す醫云ふこは多年心神を勞したるの極途にこの症をなせり藥石をもて救ふべからず唯だまさに漸々にその心を解くにあるのみと草雲こゝにおいて格太郎を呼び共に之を護り努めてその心を慰籍し決して外に出ることなし。菊子臥すこと二年病ます〳〵惡し草雲その遂に起たざるを知り一日筆を走せて彌陀來迎の圖を作り自ら菊子を抱起してその上に辭世を題せしむ菊子おぼつかなくも筆をとりて。

おひわけの佛にごせをうちまかせ

の一句を書いつけぬこの後およそ二月を經て菊子病俄かに革り草雲と格太郎に抱かれながら笑を含み合掌して身まかりき時に安政二年巳未の十二月十七日にして菊子の世壽四十二歳なりき。草雲父子は涙を拭ひつゝ遺骸を舁いて今戸町なる眞宗稱福寺に葬り證して白寶院釋齋華といふ。今戸の評判娘も今日は空しく龜田鵬齋、綾瀬の父子と冷かに背合に氷く眠りて芳魂呼べども起たず。

憐れなる菊子は草雲に嫁ぎてよりこのかた二十一年その所天をして成立する所あらしめむが爲めにさま〳〵の苦辛といふ苦辛を嘗つくし漸くにして所天の世に用ゐられ初めたるに忽ち先たちて歿しぬその薄命なるまことに悲むべきなり。されば草雲が物ごとにかゝつらはぬ性なるも一たび菊子の事に及べば則ち曰くわが妻ながらも菊子は最とめでたき貞婦なりき我をして今日あらしめたるはみなこれ菊子の恩賚なり我これに酬ゐむとするの間もあらせず忽ち朝露に先ちて一飽一暖を得ざりき憾に菊子は果報つたなき女なりけりとて睫末に涙を浮めたりきとぞ。草雲が貧苦の中よりも石碑を建また永代祠堂經料にとて三十兩を才覺して稱福寺に納めりき之もてそが菊子が早世を悲みたるの心の中をも窺ふべきか。

津藩侯藤堂和泉守高猷その號を詢藝齋といひ人と爲り賢明にして文學を好みまた書を文晁に學びひろく當時の文人等とも交りたりければ草雲もまた知遇をうけてその藩邸に行くこともありけり侯は草雲の才のよのつねならずして藩國の事に用ゆべきを知り之を召抱へむと欲し侍臣をしてその意を草雲に致さしめ且つ告るに十五人扶持を與ふることをもてす草雲その言を聞き終りもあへずから〳〵と打笑つていひけるは「藤堂家の飯粒が足のうらにつきたらば飛び歩くに不自由なれば先づ御免を蒙らむ」と侍臣乃ち默して去りき事は實に草雲が足利に歸るの前なりき

と云ふ。野鶴もと水雲の鄕に棲むべきのみ倘し鞘につくが如きことあらば遂にその性を失ふべきなり。安政もやうやく末になりて天下愈よ騷がしく尊王論盛に起りき草雲もとより心を王室に寄せその式微を慨く者とて市中の文人中の志ある輩と竊かに會合して相語らひたりしが眇々たる貧乏畫師の身なれば手の下さむ樣なく空しく腕をさすりて風雲を望むのみなりしが慶應元年に至りてたまたま足利藩主戸田侯が勤王說に傾きたりとの說を傳へ聞き局外に在りて力を添えむことを思ひ中山嵩岳の妻の妹（嵩岳の娘なりと云ふ者あれど之は誤れり）をとりて格太郎に合はせこの二人に家事を托し二十餘年ぶりにて足利に歸りぬこれ實にその年の三月三日なりき。

この時の足利は藩政も大に亂れて到る處に不平の聲を聞かざるなく當時足利七不思議と稱するものあり

そは御馬廻を「姐婆廻」、御家老を「よからふ」郡奉行を「高利武業」、足輕を「足輕からず」、目附を「目附かず」といひ此に「蟹の取次」、「無筆の祐筆と無算の勘定方」と加へてかく呼びたるなり藩政の擧らざる之もて知るべし。殊に家老の中にて勤王佐幕の二派に分れたり勤王說を主張したるは即ち川上齋佐（後に廣樹と稱し維新に足利大參事を勤め頗る漢學を以て稱ありこの人の著述に唐宋八大家文讀本に評註を加へたる書あり）にて佐幕說を取りたるは膳野秀なり二派おの〳〵この二人を領袖と仰ぎて互ひに軋轢したりき。

草雲もと齋佐と舊交ありたりければをり〳〵共に語らひ急にせば破れむとて徐々として進み先づ藩の實力を發はむことを謀りき。然るに川上派の相場兵馬（今の古雲なり）金井保一（今は知藤といへり）な

どすべて十餘人の者みなその年わかく自ら血氣にはやりて草雲、齋佐の爲す所をもどかしがりて曰くこの二人を斬らずむば勤王の大義擧るべからずとて各々その髻を切りて之を藩侯に捧げ白日に高張提灯をつけ足利は暗黑なり此の如き暗黑の處には居りがたしと聲高かに呼はりつゝ十一人の者ども袂をつらねて脫藩したり。

相場兵馬等十一人は慷慨盟つて草雲を斬らむとせしがその事遂に成らず後之と語るに及むで大にその說に服し草雲を擁して誠心隊を組み藩士は更なり町人中の志ある者を募りたるに豪商の子弟等我も〳〵と先を爭ふは隊に加はり幾ほどもなくして百餘人の多きに上りぬ。乃ち武術を講ずる爲めに一道場を建てむとの議出でたるに衆みな之を贊しおの〳〵資金を寄附し中にも當時割元名主を勤めて頗る富みたる

崎岸松兵衛および横田甚右衛門の二人にて材木を寄附したれば容易に之を建築せり草雲乃ち之に題して精武館といひぬ。

此において主幹は相場兵馬、湯澤謙吉の二人にて日夜衆を勵まして武を講じ阿部茶村、高橋和助、佐藤豊藏、大山國五郎、本島萬兵衛、柳田庄吉、中村新助、四十八願圓次、川島長十郎、戸叶角藏、岡崎平左衛門、今井才二郎などは尤も威ばりたる者なりき。

誠心隊は斯くして多くの同志を得たりければ隱然として一勢力を成したりき此れより近隣の諸藩などを說き果ては信州邊までも遊說したりと云ふ。當時戸田侯が僅かに一萬石の一小藩なるにも拘らず重きを隣藩になしたるは實にこの誠心隊あるが爲めなりき而かもまた戸田侯が大義を誤らざりしは誠心隊の力

興りて多きに居るは疑ひなき所なるべし。

草雲がこの賊心隊を擁して藩國の事に周旋したるを

り一日酒間に筆をとりて草間髑髏を畫きその上に歌

を題して曰く

いのちをば君にさゝげてかうべをば

いかなるつよきものやとるらむ

この圖今は佐藤豊藏の家に藏せり之を見れば草雲が

當時の意氣を知るに足れり。

さて格太郎は草雲の命をかしこみて江戸の家を守り

つゝありしか如何にふかく思ひこみけん慶應三年の

五月二日に母菊子の辭世の幅を挂けそが前にて妻中

山氏と共に自殺せり。この報の足利に達するや草雲

佐藤豊藏を拉して直に江戸に來り町役人の檢視を請

ひて之を稱福寺なる菊子の墓の側に葬り嚢を傾け

永代經料として百六十圓を稱福寺に納めまた足利に

歸りぬ。當時格太郎夫妻の自殺せる因由につきては

故舊門人といへどもその實を知る者なし或ひは曰く

草雲が飽きもあかれもせぬ生木を割かむとせる爲め

ならむと是れ大に誤れり蓋しその母の家は累世德川

氏の恩をうけたるが上にその身もまた幼より東廠山

に成長せしことゝて自づと德川氏を大切に思ひて佐

幕説を抱きたるに獨りその父のみが勤王の事に周旋

して討幕説を唱ふるより遂に思ひつめて自殺したる

なりと云ふ。是は松井氏が親しく説く所なりき。

草雲が賊心隊を擁して奔走すること數年にして太政

古に復し世は維新の御代とはなりぬその間しば

〳〵白刀の間をくゞりて最と危きことも多かりきそ

の功たるまた多し。

此において草雲乃ち曰く多年夢にのみ見たる王室の

繁華も幸に昔にかへりたれば老朽の身今は世に用

なしとて功名富貴を一擲して見曹の攪るにまかせ再

び口に政事を語らず官に請ふて蓮岱山を購ひ數樣の

茅屋を構えて此にうつりぬ是れ即ち白石山房なり山

房また別に硯田農舍（細川潤二郎の名けたるものな

りとぞ）あるは蓮岱畫屋、後樂堂などゝ稱し多く四

季をり〳〵の花卉を養ひ境幽にして眺をかしく見ぬ

むかしの輞川莊もかゝる處ならめなどと稱せられた

りき。

まだ此の時より自ら三白翁または蓮岱山人、白石生

などゝ稱しき平生ふかく明の遺臣朱舜水の高節を欽

ずるの餘りそが遺物にかゝる道服を得て之を着し愛

藏の七絃琴（後之を足利學校に附寄せり）を鼓して

自ら樂む之を望めば神仙の如し。

草雲すでに意を世事に絶ち予自ら善しとしたりしか

ど情にふかき性とて窮民などの飢寒に迫まれる樣を

見る時は常に涙を浮め畫を描きて之に與へ售りて米

に易へしめたりき。然れば窮民等之を德とし山に入

り柴を拾ふごとにめづらしき花を見れば折り歸りて

草雲に捧げたりと云ふ。

明治初年のことなるが故の龜山勇右衛門の妻まさに

越前にゆきて所天の墓に謁せむとしその路費なきに

苦む。蓋し勇右衛門といへるは下野國安蘇郡船越村

の農民なるが勤王の志ふかく武田耕雲齋の義擧に

與して小荷駄奉行をつとめ後に敦賀において刑せら

れたり時に年二十六にして法號を龜山忠穎居士とい

ひたる人なり。草雲乃ちふかく妻の志を憐み畫十

三幀（絹本三、紙本十）を作りて之に與ふ妻之を售

り數十金を得たりければ直に越前に行きてその墓に

詣でたりきと云ふ草雲の義氣に富むこと概ねこの類

なり。

明治九年上野公園において始めて内國勸業博覽會を開かるゝや足利の和洋商會は草雲に請ふて四季および朝夕の富士六體を畫きて之を出品すその評いと好しく忽ちにして二體は外人買ひ去り四體は邦人が求めたりき。時に露國公使マウンセー氏大にこの朝景の富士を望み譯官岡田嘉七をして切に之を請ふ草雲乃ち之を作り相場兵馬をして呈せしむ公使その價幾はくなるやを問ふ兵馬云ふわが師黃白を望まず倘し閣下にして志あらば貴國の菓物を贈られたしさわらんには師も喜ぶへしと公使よて急に露國より名產の葡萄、林檎等一筐を取よせて足利に贈りき草雲大に喜び之を寫生して後に門人等を會して共に之を食ひたりその寫生する所の畫今なほ遠岱會に存せり。

明治十五年上野公園に內國繪畫共進會あり草雲乃ち秋山晚暉、春山曉靄の二圖を出陳す二圖ともに宮內省の御用品となれり。越て十七年に第二回共進會を開かるゝや十指春風、一棹搖山の二圖を出陳すこの時に審査員の命をうけしも病に臥せるを以て之を辭せり。十九年に第三回共進會ありまた猫兒戲碁子一の圖および雪中山水を出陳す每會いつも銀章を受けたりき。

二十一年皇居御造營竣工の際に當て草雲また宮內省の命を奉じて御杉戸に月下の秋草を描き賞賜を受く藝林傳へて以て榮となす。

時に男爵高崎正風この月下秋草の圖を見て難じて曰く芙蓉は夜間必ずしぼむものなるにこの圖のものみな開きたり太だ誤れりと人ありこの言を傳へて草雲に告ぐ草雲曰く畫家の心を知らざる者ほど困るものはなきなり我わかき時より心を本草學に寄せ芙蓉の夜間しぼむことを知らざるものならむやさればこそ少しくすぼみたる心持にて畫きつ悉とくすぼめて畫くが如きは圓山應擧は或ひは之を爲すべけれど草雲の如きは太だ之を肯んぜざる所なりとて笑ひぬ。

明治二十二年佛國巴里萬國大博覽會あり草雲また政府の勸めに依りて疎密の畫おの〳〵一幀を作りて出陳し賞賛を博せり。

二十三年十月宮內省に帝室技藝委員を置かるゝに當りて草雲またその命を拜す是れ畫家にありては非常の榮譽とする所なりき然るに老病をもて之を辭す帝國博物館長九鬼隆一時に名古屋に在りて草雲の命を辭したるよしを聞き直に一書を寄せ任につくを勸むその書に曰く

貴下儀今般技藝員被仰付候處榮耀無二此上一難レ有被存候へ共永々病氣に付御用に相立不レ申候ては恐入候間御辭退申上候趣御申出の次第は委細承知致候然に右技藝員之儀は美術奬勵保護上厚き御思召により榮譽の職を賜はり候譯にて尋常官吏と異なり出京の上其職に就かざるべからずと申す次第にも無レ之素より貴地住居にて可レ然疾病有レ之候はゝ厭く迄安養被致候樣致度仍而御心配なく御請被申上候方妥當の御儀と存候右は旅中甚略儀ながら得二御意一候也御答書は京都三條麩屋町俵屋方宛にて可レ成早々御差越相成度候。

名古屋にて

十月十七日　　九鬼隆一

田崎芸ノ殿

門人等曰くこの事たるわが師一家の名譽にあらず實に足利の名譽なりとて强がちに請ふてやまざりければ遂にその命を拜するに至れり。

二十六年米國シカゴ府大博覽會あり草雲また圓形の

大匾額に墨畫の富士を出陳し褒賞として銅牌および褒狀を受けたりき。

内親王殿下日光山御啓行のをりは畏くも命を草雲に下して畫を召さるゝこと數回に及べり草雲大に感激しその度ごとに齋戒し病を力めて揮毫して上つるを例とし御賞賜再三なりきと云ふ。

これより後草雲の畫名忽ち内外を動かし竹堂、寛齋、雅邦、楳嶺らと共に推されて當代の鉅手と稱せらるゝに至りしかば貴紳名士のわざ〳〵足利に來りて白石山房を叩く者太だ多し。

宮内大輔子爵杉孫七郎ふかく草雲の風流高節を恰び白石山房を訪ひ秋の長き一夜を語り明しぬこの時子爵の詠みて草雲に似したる歌あり曰く。

草の家に朽木のほだ火たきながら
秋の夜ながく君とかたらむ

九州の奇士に百外道人なるものあり少くして任俠を喜び博徒の群にありしがその年四十に及むで翻然として悔る此より節を折て書を讀み詩を學び七十を過る頃より天下を漫遊し東京に來りて勝海舟を氷川に訪ひつばらにその齎歴を語りて揮毫を需む海舟乃ち紙をとりて賽を描きて

何事もびんころかしの世なりけり

の一句を題し且つ云ふ足利に老畫師草雲なる者あり少き時は任俠を喜び中年より禪に參して大に得る所ありて中〳〵におもしろき男なりと聞けり子須らく足利に往き彼にこの下の句をつけさせよとあるに百外とはありがたしとて直に足利に來り海舟の書を出して草雲に示す草雲笑てその傍に筆を畫き添えその下に題して曰く。

ばかしたが勝狐ちよぼ一

百外大に喜て去りきと云ふこは明治二十年頃の事なりき。

今までは足利の人も草雲をもてよのつねの畫家とのみ思ひたりしが帝室技藝員に任ぜられて天下有數の畫伯と知れてより今更の如く驚き我も〳〵と爭てその畫を請ひ白石山房の門に市を成しぬ草雲その煩きに堪えず堅く門を鎖して「老病に付來客謝絶」と記しき然れど裏より入りてその室を衝きたり此においてまたその室に記して云ふ。

一三十分より長坐御無用
一人の噂
一政事がましき事
一庭内の花木を無心する事
一揮毫の催促
一新に畫を頼む事
一新聞口調を用る若輩者

以上更に御斷〳〵

無遠慮なる蓮岱寺の和尚譏

その來訪者の多かりしを知るべし倘し客の長坐して歸らざる者ある時は忽ち大喝して曰く「俗物共彼の張紙を見よ」と或ひは

世の中は水の車と火の車
人のくるまもたへぬうるさゝ

または

山猿が來ては濁すや苔清水

の一句を示し忽ちその燕室の中に隱れて高臥しまた出でざりきとぞ。

世人或ひは譏て草雲をもて無學の畫師といふものありこはまたくその平生を知らざる者の說なり蓋し草雲もその年而立に至らざる前は太だ多く書を讀ま

ざりしかど梁星巖に謁してより諸子百家を渉獵し尤も好で莊子を讀みたりきと云ふ今や白石山房に存する所の書無慮四千卷あり決して世人が云ふ如き無學にはあらざりき。

わきて本草學に至りては頗るその蘊奥を究め優に一家を成すほどのものありきといふ。

禪要は尤も心を寄せたることとて打坐の餘常に古佛の語錄を繙きその會心の處に逢ふては往々曉に徹したり。

草雲また國風を好み平生咏すてたるもの太だ多し今その一二を拾はむ。

春日抱病獨寂然

あめつちのたくみをぬすみうつし繪の
　とがやつもりしやまひなるかも

蓬芒久欠蕾圖線

たれとめて花はものかは山姫の
　笑ふ顏だに見ぬはるにこそ

武藏にすめるころよめる

むさし野にすむかひあるかけふの月
　にげよとおもふ山のはもなし

今樣

合歡てふ文字もめでたきに百合てふ文字もうれしきにあはでの森のあはでのみおひ行草ぞあはれなる

赤きこゝろの見る石もかたくに守れ文字のせき筆の命はつくるとも曲りし墨にくろむまじ

四季今樣

春の夜半こそうれしけれおぼろ月夜の梅が香もひとりながむる柴の扉にすきまの風ぞかほりぬる

夏の夜はこそうらみなれふすほどもなくとりのねのまたつれなきにかねごとの逢てもあかぬこゝろかな

秋の夜はこそしのばれはつかに君を見てしより戀しきときは初雁のはつかに君を見てしより啼てわたらぬときぞなき

冬のよはこそ思はれこふるふすまにねもやらで音つれてゆく玉霰ふりしむかしを忍ぶかな

また時に狂歌を咏みき鐵道橋のために山房の蓮池を横斷せられて

火の車運の臺をつき通し
　滅法界となりにけるかな

レーマチスを患ひ室內に杖つきて

武士にすゝめ〳〵と打ふりし
　杖も疊の上をつくなり

自作の踏臺に題して

踏臺になつたと人の笑ふとも
　足らぬ處を足す人になれ

渡良瀨川の畔を歩して

世を清くすまむといひしわたらせの
　水もあかゝねくさくなりけり

年わかき人を戒めて

世の中をうしと思うなうしろより
　馬よりはやき汽車が追ひくる

なほ折にふれては俳諧をもなしきその尤も得意の句あり曰く

目にしむや鯱の背に苔の花

姻戚某久しく同居してまさに去らむとするに

かしましき蟬と思へど別れ哉

と書して呈するに草雲直に筆とりて

木枯やわかれし蟬の思ひ出て

と書して與へぬ。

草雲が嗜みたる食物は猪肉、豆腐、鯉、うに、せんじ、からすみ、糊の如き飯、鷄卵などなり鷄卵は少くも一日に七八個を食し夜中また眼の覺めたるをりは玉子水につくりて呑みたりき酒は尤も嗜む所とて一日に二升は傾けたりきと云ふ。

二十八年の末に至りて草雲老病ます〳〵加はり起居その意の如くならず唯だ高臥して書史を讀みまた雑をとらず此よりおそよ三年その間褥中にて描きたるは蕪村の俳畫に擬ねたる芭蕉其角らの圖十數枚のみなりき。

此より先き門人古雲のすゝむるまゝに足利郡小俣村なる木村半兵衛の二男敬三を養ふて嗣とせしが三十年に至りて離縁してその家に歸しぬ。また阿部茶村、相場古雲、戸叶角藏、川島瀨石、川島長十郎、荻野萬太郎、市川安左衛門、相場杢左衛門、福田松琴等の故舊門人十餘人を枕上に招き語て曰くこの白石山房および書畫古器等悉く舉て子等に付與す子等之を共有となして遊樂の處とせよ他日子等此に會しまた老畫師草雲を追懐するならむと是において門人等相議し各々財を出して四千圓を得たり乃ちその半を草雲が養病の料に充て半は山房を保存するの費に供するに決し之を草雲に告ぐ草雲大に喜びて頷づきぬ。

その翌三十一年八月草雲病革る門人等大に驚き急に醫學博士青山胤通を招きて療せしめたれども効なし九月一日午前六時三十分遂に瞑す享年八十又四なりき。

越て十月二日午後五時を以て門人等草雲の遺骨を舁いて足利長林寺に葬り法諡を遊玄院畫仙草雲居士といふ。

草雲の訃音傳ふるや天下みな藝苑の一厄となし弔する者太だ多し九鬼隆一遙に祭文を寄す曰く

爰に明治三十一年九月一日帝室技藝員草雲田崎翁病て其鄉足利遵岱山に卒す越て十月二日改めて長林寺の塋域に葬る悲いかな維新以來奎運隆昌百般の學術技藝蔚然として興起するの時に當り特り繪畫の技に至りては未だ其の然らざるものありき予輩有志の徒之を慨し獎勵作振に努めたり是に於てか翁等諸君斯道に堪能なる者相率ゐて其蘊蓄する所を發揮せり是よりの後繼で起る者駸々として輩出し斯道復盛に遠く歐米諸國に稱揚せられ國光を輝かすに至れるは是れ實に翁等が卓拔超脱の技に因るに非ざれば焉ぞ能く此の如くならんや翁少して谷文晁、川崎梅翁の門に學び業成るの後四方を周遊し專ら力を寫實に注ぎ大に得る所ありといふ後徐熙、沈周の奥を窺ひ別に自ら一機軸を出し其老境に入るに及び學識と共に進み作る所皆筆力遒勁殆天工を奪ふものゝ如し是を以て聲名愈よ隆く遂に天聞に達して帝室技藝員に班せらる洵に斯道の榮譽と謂ふべきなり是より先翁頽老世事を厭ひ復文墨を手にせず靜に殘齡を遵岱山に送らむとせしが圖らざりき一期二豎の侵す所となり終に白玉樓中不歸の客となるとは悲いかな嗚呼比年以來斯道の耆宿漸凋謝し曩に守住貫魚、森寛齋、岸竹堂、幸野楳嶺、野口幽谷を弔し今復翁を喪するに會す前哀の未だ去らざるに後傷の之に繼ぐは抑亦斯道の爲め眞に痛恨に堪えざるなり茲に遙かに悼詞を捧げ惋惜の情を叙す翁在天の靈其れ尚くは之を饗けよ

明治三十一年十月二日

帝國博物館總長　男爵　九鬼隆一

この一篇の吊詞能く草雲が半生の生涯を盡したり以て碑版文字となすべし草雲もまた九泉の下に點頭するならむ。

小野湖山は尤も舊き交遊なればその訃音に接するや直に一詞を送りき曰く

哭寄

草雲田崎翁

翁與レ余相知在二天保年間一時翁住二淺草山谷堀一距レ今六十年可レ謂レ舊矣余衰耄不レ能レ會レ葬賦二小詩一以當二一瓣香一

湖山八十五耄叟小野長愿

舊妙田翁兼俠名。　敢忘遲上締二鷗盟一

短篇哭寄君聰否。　六十年來舊雨情。

こゝにおいて門人等草雲の遺囑に從ひ蓮岱會を結び白石山房および遺物を保護せり近日また將さに草雲の肖像を刻みて山房に安せむとすといふ。

蓮岱の山舊に依て青く渡瓦瀨の水舊に依て流れ花落ち花開くと雖もその主人は永く歸ることなく二たびまた明月に對して七絃琴を弄する好風丰を見ることを能はず此に至りて鸞絃長へに絶えぬ。

近世名匠談　終

明治三十三年三月廿八日印刷
同　年三月卅一日發行

近世名匠談
實價金卅五錢

著者　東京市日本橋區通四丁目五番地　森慶造

發行者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　和田むゑ

印刷者　東京市日本橋區通四丁目角　青木弘

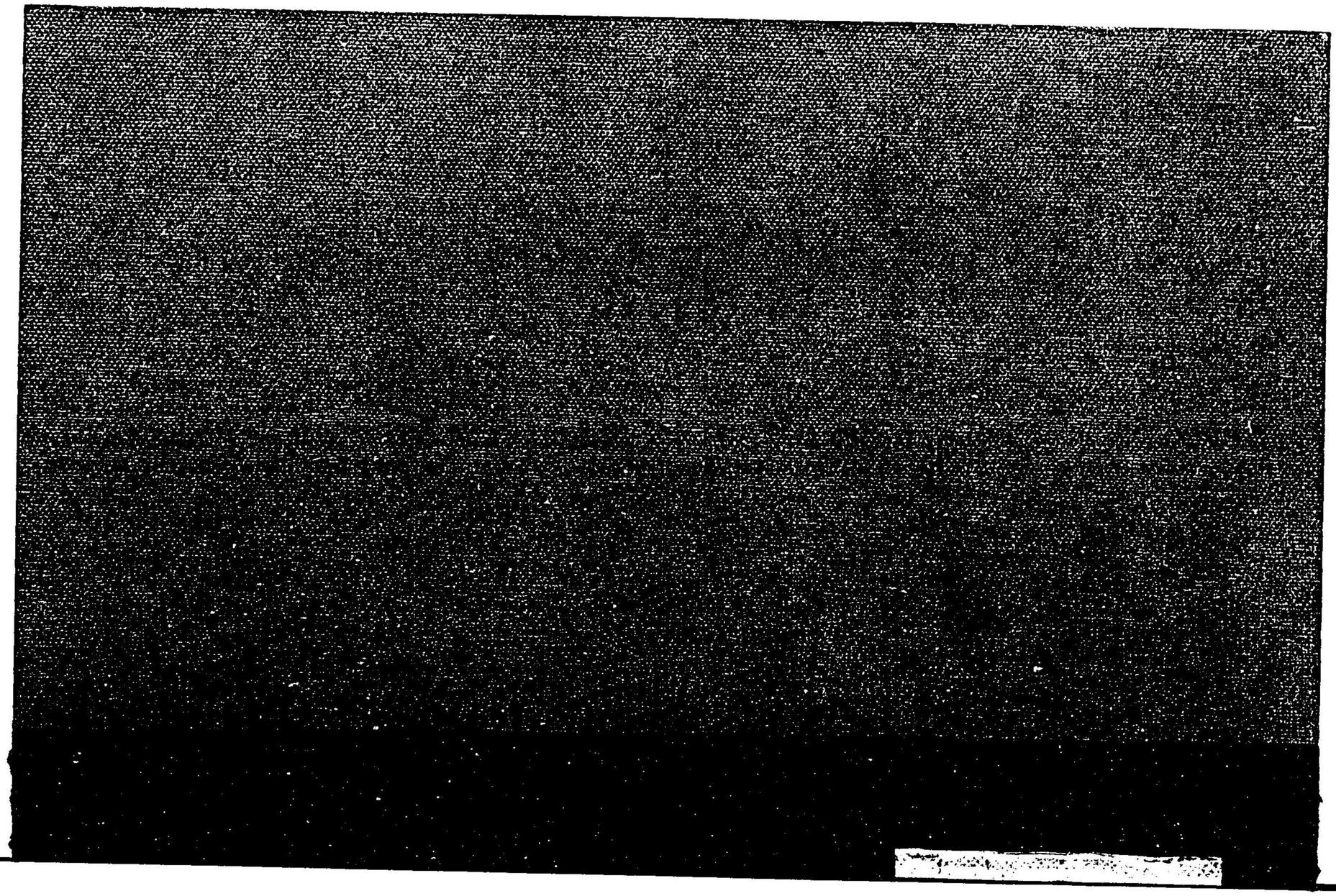
發行所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　春陽堂
電話本局五拾壹番

印刷所　株式會社　秀英舍
（電話新橋十八番）

●内に發行者●
●印刷者●
●文字は書籍印刷
●華麗圖書出版

고2111 97

玉堂



721.028
M759k

069758-000-9

721.028-M759K

近世名匠談

森　大狂／著

M33

CEC-0487